

行事食の認知と経験を通じた現在の調理文化の調査研究 —岡山県と島根県の比較—

我如古葉月* 松本侑子* 木本眞順美* 山下広美*

要旨 日本人は、季節や人生の節目をハレの日とし、その節目には特別な趣向や思いを込めた食事を作り味わってきた。しかし最近では、核家族化などの影響から、年中行事や通過儀礼、それに伴う行事食や儀礼食が伝承されにくくなっている。本研究は、日本調理科学会において企画された「行事食・儀礼食の現状を把握し、日本の食文化を考察する」ための全国的な実態調査の一環として行われた。このうち、中国地方の地理的条件の異なる県として岡山県と島根県を比較することとした。両県の県内出身者のうち子世代（10～20歳代）、親世代（40～50歳代）を抽出し、年中行事の認知・経験の有無を比較、考察した。世代ごとに両県間の比較を行った結果、両世代における盂蘭盆の認知及び経験、子世代の上巳、端午の節句の認知では島根県が有意に高い割合を示したことから、岡山県は島根県よりも年中行事の伝承が薄れてきていることが示唆された。

キーワード：調理文化、行事食、認知と経験

I はじめに

現在の日本では、女性の社会進出や晩婚化に伴う合計特殊出生率の低下、平均寿命の延長や高齢人口の増加により少子高齢化が進んでいる。また、人口の都市集中や都市から離れた市町村の過疎化が問題となっている。さらに、世帯数は増加し、平成22年には5,000万世帯を越え、特に単独世帯や夫婦のみの世帯、高齢者世帯が増加している^{1) 2)}。一方で、1世帯当たりの人員は減少しており¹⁾、いわゆる“核家族化”が進行している。その影響で、世代間の交流の機会は薄れ、日本の伝統的な食文化や郷土料理は若い世代に受け継がれにくくなっており、年中行事や通過儀礼、それに伴う行事食や儀礼食もまた伝承が薄れていっていると考えられる。

古来より日本人は、季節の節目や人生の節目を非日常で特別な日（ハレの日）とし儀礼や祭りを行ってきた。それに伴い、その節目には特別な趣向や思いを込めた食事を作り、大切に味わってきた。現在のように食生活が豊かになる前は、日常の日（ケの日）の食事はいたって質素なものであっただけに、ハレの日の食事には自然や神仏への感謝の思いや、未来の幸福への強い願いが込められた³⁾。しかし、食生活が豊かになり、あらゆる食材をいつでも

買い求めることが出来るようになった現在では、ハレの日の食事に込められた様々な思いは薄れ、食の季節感や旬を感じにくくなり、年中行事や通過儀礼を重要視することも少なくなっていると考えられる。

本研究は、日本調理科学会において企画された「行事食・儀礼食の現状を把握し、日本の食文化を考察する」ための全国的な実態調査の一環として行われた。過去に、大正末期から昭和初期にかけて「日本人の食事」を聞き取り調査した記録集『日本の食生活全集』が残されているが、それ以降の大掛かりな調査は行われていない。本研究では、岡山県と島根県における年中行事について考察した。

岡山県は、山陽道の中央に位置し、東は兵庫県、西は広島県に隣接し、南は瀬戸内海を臨んで四国に、北は山陰地方と接し、中国・四国地方の交通の要衝として重要な位置にある。現在、県内縦横に延びる高速道路網、国内外へ飛び立つ岡山空港、新幹線をはじめ東西南北につながる鉄道など、交通基盤が充実している。また、北部の一部を除いて、比較的日照時間は長く、年間降水量も少ない温暖な気候を有している⁴⁾。一方で、島根県は中国地方の北部にあり、東は鳥取県、西は山口県、南は中国山地を隔て

*岡山県立大学保健福祉学部栄養学科

〒719-1197 岡山県総社市窪木111

て広島県に接し、北は日本海に臨んでいる。島根県は出雲・石見・隠岐の三国から成り立っており、神話の舞台となった出雲は、出雲大社をはじめ数多くの古社があり、10月には全国の八百万の神々が出雲の国で一堂に会するため「神在月」と呼ぶ³⁾⁵⁾。また、総人口に占める65歳以上人口の割合が29.1%と全国で2番目に高い¹⁾。

このように中国地方に属する2県でも、自然環境や生活状況に地域性がみられる。岡山県と島根県における年中行事の認知と経験について比較することは、両県における食文化の伝承を理解する上で意義あることと思われる。

II 方法

1. 調査対象および時期

調査対象は、岡山県又は島根県の大学に在学している学生及びその家族、それ以外の一般人とし、全国統一調査用紙を2010年4月に配布、2010年4月～8月に回収した。

2. 調査内容

調査項目は、年齢、家族構成、居住期間など属性に関する項目と、17の年中行事の認知と経験の有無などの項目について質問した。評価は岡山県と島根県の世代間又は世代ごとの比較において、 χ^2 乗検定を行い、有意水準5%未満とした。解析には、統計解析ソフトIBM® SPSS® Statistics 19を用いた。ま

た、対象者には、本研究の主旨を説明し、またデータは、研究目的のみに使用することを文章および口頭にて説明し、実施した。

III 結果

1. 対象者特性

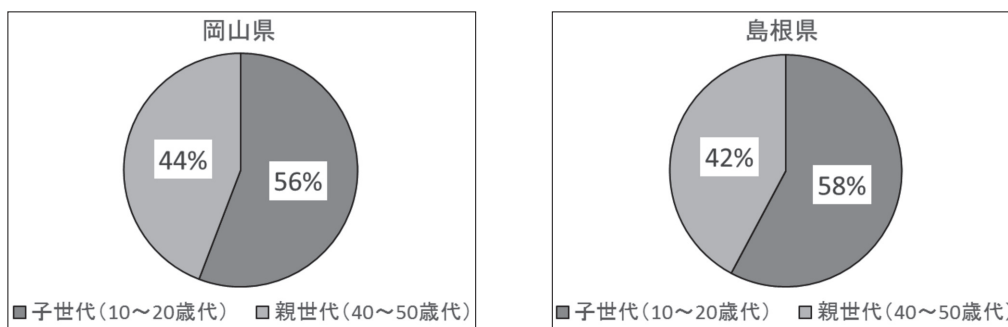
回答数は岡山県719名、島根県225名であった。岡山県で回収した調査票から、①10年以上岡山県内に居住している者、②10年以上岡山県外に在住している者、③現在岡山県外での居住期間が10年未満で以前に岡山県に10年以上居住していた者、④現在岡山県内での居住期間が10年未満で以前に岡山県外に10年以上居住していた者、⑤現在岡山県での居住期間が10年未満で以前に10年以上居住していた地域がない者に分け、①③⑤を岡山県内出身者、②④を岡山県外出身者とした。なお、⑤の全体に占める割合は、両県ともに5%未満であった。島根県で回収した調査票も同様に行うと、岡山県では県内出身者410名(57.0%)、県外出身者309名(43.0%)、島根県では県内出身者170名(75.6%)、県外出身者55名(24.4%)であった(表1)。このうち、本研究では両県の県内出身者のデータのみを解析対象とした。

次に、両県の県内出身者の年齢をもとに、子世代(10~20歳代)、親世代(40~50歳代)、高齢者世代(60歳以上)、その他(30歳代)に分けると、岡山県では子世代215名(52.4%)、親世代170名(41.5%)、高齢者世代21名(5.1%)、その他4名(1.0%)、島根県

表1 県内外出身者および世代別の割合(岡山県および島根県)

	県内外出身者の割合(%)		世代別割合(%)			
	県内	県外	子世代 (10~20歳代)	親世代 (40~50歳代)	高齢者世代 (60歳以上)	その他 (30歳代)
岡山県	57.0	43.0	52.4	41.5	5.1	1.0
島根県	75.6	24.4	43.5	31.8	1.2	23.5

図1 解析対象者中に占める子世代と親世代の割合(岡山県および島根県)



では、子世代74名(43.5%)、親世代54名(31.8%)、高齢者世代2名(1.2%)、その他40名(23.5%)であった(表1)。このうち、本研究では、子世代および親世代のみを解析対象に用いた。両県の子世代と親世代のみを抽出し割合を示すと、岡山県では子世代55.8%、親世代44.2%であり、島根県では子世代57.8%、親世代42.2%であった(図1)。

また、両県の県内出身者の家族構成の分布は、岡山県で同世代25.7%、二世帯43.0%、三世帯25.7%、四世代0.3%、本人一人4.7%、その他0.5%であり、島根県では同世代9.5%、二世帯36.5%、三世帯38.1%、四世代0.8%、本人一人13.5%、その他1.6%であった。二世帯及び三世帯に注目すると、岡山県では三世帯より二世帯の方が多く、島根県では二世帯と三世帯であり差がなかった(図2)。

2. 各県における世代間比較結果

2-1. 各県における年中心事の認知及び経験の世代間比較

2-1-1. 年中心事の認知の割合および経験の割合

世代間での年中心事の認知の割合において、どちらの県でも有意な差がみられた項目は盂蘭盆、秋分の日、秋まつりの3項目であった。岡山県のみで有意な差がみられた項目は、七草、上巳、春分の日、端午の節句、土用の丑、冬至、春まつりの7項目であったが、島根県のみで有意な差がみられた項目は1つもなかった。また、子世代と親世代の両方で「認知あり」が100%であった項目は、岡山県では正月のみであったのに対し、島根県では正月、節分、上巳など8項目であった(表2)。

世代間での年中心事の経験の割合において、どちらの県でも有意な差がみられた項目は春分の日、端午の節句、盂蘭盆、秋分の日、冬至の5項目であ

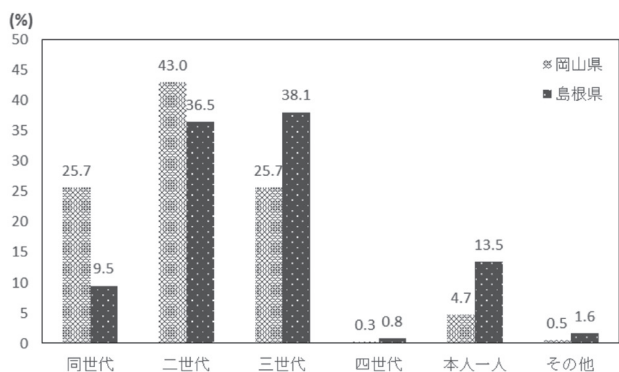


図2 家族構成の比較

た。岡山県のみで有意な差がみられた項目は、七草、上巳、土用の丑、春まつり、秋まつりの5項目であったが、島根県のみで有意な差がみられた項目は1つもなかった。また、子世代と親世代の両方で「経験あり」が100%であった項目は、島根県で正月、節分、クリスマス、大晦日の4項目であったのに対し、岡山県では1つもなく、「経験あり」が100%であった項目は親世代の正月のみであった(表3)。

2-1-2. 有意差のあった行事について

以下、両県または岡山県で有意差のあった行事について記述する。

盂蘭盆

盂蘭盆とは、冥界(死後の世界)からもどってくる先祖の霊を迎えて供養する仏教の行事のことで、一般には「お盆」といわれるほか、精霊会、魂祭などといわれることもある⁶⁾。盂蘭盆の流儀や法式は、家系や地域によって異なるが、一般的には、1週間前に墓掃除や井戸替え、大掃除などをし、13日の昼の内にお墓参りを済ませ、夕方までに精霊を迎えてまつる盆棚(精霊棚)を作る。仏壇から精霊棚に先祖の位牌を移して供花や供え物をし、きゅうりやなすで作った牛や馬などを供える^{6) 7)}。

表2 岡山県と島根県における年中心事の認知の割合

年中心事	世代別	岡山県			島根県		
		認知あり	認知なし	有意差	認知あり	認知なし	有意差
正月	子世代	100.0	0.0		100.0	0.0	
	親世代	100.0	0.0		100.0	0.0	
七草	子世代	96.5	3.5	5%水準で有意差あり	95.5	4.5	
	親世代	100.0	0.0		100.0	0.0	
節分	子世代	99.5	0.5		100.0	0.0	
	親世代	100.0	0.0		100.0	0.0	
上巳	子世代	93.7	6.3	1%水準で有意差あり	100.0	0.0	
	親世代	99.4	0.6		100.0	0.0	
春分の日	子世代	89.3	10.7	1%水準で有意差あり	94.4	5.6	
	親世代	99.4	0.6		100.0	0.0	
端午の節句	子世代	91.7	8.3	1%水準で有意差あり	100.0	0.0	
	親世代	99.4	0.6		100.0	0.0	
盂蘭盆	子世代	55.1	44.9	1%水準で有意差あり	74.5	25.5	1%水準で有意差あり
	親世代	81.8	18.2		95.9	4.1	有意差あり
七夕	子世代	98.0	2.0		100.0	0.0	
	親世代	95.8	4.2		98.0	2.0	
土用の丑	子世代	96.1	3.9	5%水準で有意差あり	100.0	0.0	
	親世代	100.0	0.0		100.0	0.0	
重陽の節句	子世代	18.5	81.5		19.0	81.0	
	親世代	28.0	72.0		18.4	81.6	
お月見	子世代	98.5	1.5		100.0	0.0	
	親世代	100.0	0.0		100.0	0.0	
秋分の日	子世代	86.8	13.2	1%水準で有意差あり	91.4	8.6	5%水準で有意差あり
	親世代	100.0	0.0		100.0	0.0	
冬至	子世代	91.3	8.7	1%水準で有意差あり	92.9	7.1	
	親世代	100.0	0.0		100.0	0.0	
クリスマス	子世代	99.5	0.5		100.0	0.0	
	親世代	100.0	0.0		100.0	0.0	
大晦日	子世代	99.5	0.5		100.0	0.0	
	親世代	100.0	0.0		100.0	0.0	
春まつり	子世代	23.4	76.6	1%水準で有意差あり	31.8	68.2	
	親世代	44.3	55.7		45.9	54.1	
秋まつり	子世代	38.4	61.6	1%水準で有意差あり	38.1	61.9	5%水準で有意差あり
	親世代	82.7	17.3		65.8	34.2	有意差あり

(単位: %)

盂蘭盆は認知・経験ともに、岡山県と島根県の両県で有意差がみられた。また、認知・経験ともに、子世代でも親世代でも岡山県より島根県の方が「認知あり」または「経験あり」の割合が高かった。子世代で「経験あり」と答えた人の割合は両県ともに50%未満であった。

彼岸

彼岸とは、春分または秋分の日を中心にした前後七日間の仏教行事で、岸法要「^{ひがんえ}彼岸会」ともいう⁶⁾。春分前後は春の彼岸、秋分前後は秋の彼岸という。春の彼岸ではぼた餅、秋の彼岸にはおはぎを供える。現在では春の彼岸に作られるぼた餅と秋の彼岸に作られるおはぎは同じものであるが、もともとは餅の外側をあんでおおったものを「ぼた餅」、蒸したもち米をそのまま丸めてあんをまぶしたものを「おはぎ」と呼んだといわれる⁶⁾。

春分の日認知は、岡山県のみで有意差がみられた。春分の日認知では、島根県の親世代で「認知あり」が100%であった。春分の日経験は、岡山県と島根県の両県で有意差がみられた。両県ともに、親世代では約9割の人が行事を認知・経験しており、認知と経験にあまり差異がみられないが、子世代の約3～4割の人は行事を認知していても、経験したことがないことが示唆された。

秋分の日認知・経験ともに、岡山県と島根県の両県で有意差がみられた。秋分の日認知では、両県の親世代で「認知あり」が100%であった。両県ともに、親世代では約9割の人が行事を認知・経験しており、認知と経験にあまり差異がみられないが、子世代の約1割の人は行事を認知しておらず、約4～5割の人は経験したことがないことが明らかとなった。

秋まつり

秋まつりとは主に新嘗祭を表す。新嘗祭とは、稲の収穫を祝い、翌年の五穀豊穡を祈る儀式であり、「しんじょうさい」とも読む。また、天皇が即位後にはじめて行う新嘗祭を特に^{だいじょうさい}大嘗祭（「おおにえのみまつり」とも読む）という。新穀を神に献じ、食するという行事は、古来から広く一般に行われており、無形文化財の石川県能登半島の「アエノコト」という行事などもその一つである。』⁶⁾とある。なお、明治時代以後、新暦に移行するにともなって、11月

23日と定められた。全国の神社でも行われる。戦後は「勤労感謝の日」として国民の祝日になった。

秋まつりの認知は、両県で有意差がみられた。子世代の認知の割合は両県ほぼ同じで約4割であるが、親世代の認知は、島根県よりも岡山県の方が高かった。また、秋まつりの経験も同様で、子世代の経験の割合は両県ほぼ同じで約3割であるが、親世代の経験は、島根県よりも岡山県の方が高かった。

七草

七草は五節句の一つで、「^{じんじつ}人日」、「若菜の節」ともいい、旧暦の一月七日にあたる。この日に春の七草を入れた「七草粥」を食べて、無病息災を願うとされる⁶⁾。七草の行事については、『七草を迎えるにあたって、その前夜、柊のような刺のある枝葉を戸口に挟んでお清めを行う。次に「七草叩き」といって、唱えごとをしながら七草を包丁で叩く。この唱えとは、もともとは「鳥追い歌」のようであり、豊作を祈るときのものである。これが七草の行事と融合し、邪気を祓い、無病息災、万病を払う行事となっていった。7日の朝を迎えると、まず年神に供えて、それから家族で食するのである。』⁷⁾とある。七草粥に使われる春の七草（芹、薺、^{せり なずな ごぎょう はこべら ほとけ}御形、繁縷、仏の

表3 岡山県と島根県における年中行事の経験の割合

年中行事	世代別	岡山県			島根県		
		経験あり	経験なし	有意差	経験あり	経験なし	有意差
正月	子世代	99.5	0.5		100.0	0.0	
	親世代	100.0	0.0		100.0	0.0	
七草	子世代	65.2	34.8	1%水準で有意差あり	74.2	25.8	
	親世代	80.4	19.6		65.3	34.7	
節分	子世代	96.7	3.3		100.0	0.0	
	親世代	99.4	0.6		100.0	0.0	
上巳	子世代	87.4	12.6	5%水準で有意差あり	91.5	8.5	
	親世代	95.1	4.9		98.0	2.0	
春分の日	子世代	53.9	46.1	1%水準で有意差あり	66.2	33.8	1%水準で有意差あり
	親世代	89.8	10.2		94.0	6.0	
端午の節句	子世代	73.2	26.8	1%水準で有意差あり	73.9	26.1	1%水準で有意差あり
	親世代	91.6	8.4		96.0	4.0	
盂蘭盆	子世代	27.6	72.4	1%水準で有意差あり	41.8	58.2	1%水準で有意差あり
	親世代	62.3	37.7		85.7	14.3	
七夕	子世代	67.7	32.3		78.9	21.1	
	親世代	69.7	30.3		78.0	22.0	
土用の丑	子世代	89.8	10.2	5%水準で有意差あり	95.8	4.2	
	親世代	96.4	3.6		100.0	0.0	
重陽の節句	子世代	5.8	94.2		2.4	97.6	
	親世代	8.0	92.0		2.6	97.4	
お月見	子世代	73.3	26.7		70.4	29.6	
	親世代	79.0	21.0		80.0	20.0	
秋分の日	子世代	52.0	48.0	1%水準で有意差あり	58.6	41.4	1%水準で有意差あり
	親世代	88.3	11.7		96.0	4.0	
冬至	子世代	69.2	30.8	1%水準で有意差あり	70.0	30.0	1%水準で有意差あり
	親世代	91.1	8.9		92.2	7.8	
クリスマス	子世代	98.6	1.4		100.0	0.0	
	親世代	98.8	1.2		100.0	0.0	
大晦日	子世代	97.6	2.4		100.0	0.0	
	親世代	99.4	0.6		100.0	0.0	
春まつり	子世代	14.4	85.6	1%水準で有意差あり	20.5	79.5	
	親世代	32.2	67.8		24.3	75.7	
秋まつり	子世代	27.9	72.1	1%水準で有意差あり	31.0	69.0	
	親世代	76.3	23.7		47.4	52.6	

(単位: %)

座、菘、蘿蔔) それぞれに効能があり、正月の御馳走続きで弱った胃腸を整えるともいわれている⁷⁾。

七草の認知・経験ともに、岡山県でのみ有意差がみられた。七草の認知では、両県の親世代は「認知あり」が100%であった。七草の経験では、岡山県では、親世代の方が「経験あり」の割合が高いが、島根県では子世代の方が高かった。正月とは異なり、七草では、子世代・親世代ともにほとんどの人が行事を認知しているが、そのうちの約2～3割の人は行事をしたことがないことが示唆された。

上巳

上巳とは、五節句の一つで、三月三日の「桃の節句」「雛祭」のことである。本来上巳とは、三月はじめの巳の日をいい、もともと中国で身を清める日とされていた。その後古来の日本に伝わり、貴族が川辺で宴を催し、祓をする日とされた。それが平安朝の頃からあったとされる「雛遊び」や形代信仰と結びつき、雛祭の形へ発展したといわれている。上巳には、雛人形やその調度類を飾り、桃の花、菱餅、草餅、ひなあられ、桃花酒、白酒などを供え、これらの他に、蛤の吸い物やちらしずしなどを食べ、女兒の健やかな成長を祈る。古い雛祭の原型は、鳥取県の「ヒナオクリ」と呼ばれる習俗のように、現在各地に「流し雛」という形で残っている^{6) 8)}。

上巳の認知・経験ともに、岡山県でのみ有意差がみられた。上巳の認知では、島根県の両世代で「認知あり」が100%であった。両県ともに、親世代ではほとんどの人が行事を認知・経験しているが、子世代の約1割の人は行事を認知しているが、経験したことがないことが明らかになった。

端午の節句

端午は五節句の一つであり、「菖蒲の節句」「重五」「端陽」ともいい、旧暦、新暦ともに五月五日に行く⁶⁾。現在は「こどもの日」として国民の祝日に定められ、「こどもの人格を重んじ、こどもの幸福をはかるとともに、母に感謝する」日とされている⁹⁾。端午の節句には、鯉幟を立て、五月人形や鎧兜などを飾り、子どもの健やかな成長を祈る。また、粽や柏餅、よもぎ餅を食べ、菖蒲湯に入るのが習わしとされている。

端午の節句の認知は、岡山県のみで有意差がみられた。端午の節句の認知では、島根県の子世代・親

世代の両方で「認知あり」が100%であった。端午の節句の経験は、岡山県と島根県の両県で有意差がみられた。両県ともに、親世代では約9割の人が行事を認知・経験しており、認知と経験にあまり差異がみられないが、岡山県の子世代の約1割の人は行事を認知も経験もしておらず、約2割の人は、認知はしているが経験したことがないことが分かった。島根県の子世代の約3割の人は行事を認知しているが、経験したことがないことが伺えた。

土用の丑

土用とは雑節の一つであり、土の働き旺盛の時節という意味である⁶⁾。土用について、『木、火、土、金、水の五行を四季に配して、春に木、夏に火、秋に金、冬に水とし、残る土を二十四節気の立春、立夏、立秋、立冬の前の約18日間に配した。したがって、もともと土用は四季それぞれにあるが、現在は、一般的には夏の土用(立秋前)のみをさす。』⁶⁾とある。

土用の丑の認知・経験ともに、岡山県でのみ有意差がみられた。土用の丑の認知では、岡山県の親世代と島根県の両世代で「認知あり」が100%であり、岡山県の子世代も95%以上の人が「認知あり」と答えていることから、ほとんどの人が認知していることが分かった。土用の丑の経験では、島根県の親世代で「経験あり」が100%であった。

冬至

冬至は、二十四節気の一つで、年間を通して日照時間のもっとも短い日である⁶⁾。冬至の習わしについて、『この日、小豆がゆやくんにゃく、保存してあるかぼちゃ、あるいはなまこを食べ、ゆず湯に入ると、無病息災を祈る。ゆずを縁の下に投げ入れると火を防ぐともいう。古くは餅をついて食べたともいわれる。特に、「冬至にかぼちゃを食べると長生きする」という言い伝えがある。また、冬至かぼちゃは金運を祈るためとも、中風や風邪にかからないように祈るともいう。れんこん、きんかん、なんきん(かぼちゃの異名)、ぎんなん、こんにゃく、にんじんなど、「ん」のつく食品を食べると幸運が得られるという言い伝えもある、また、沖縄では、春の七草がゆに似た「冬至がゆ」を作る習わしがあり、冬至そばを食べる。』⁶⁾と記されている。

冬至の認知は、岡山県のみで有意差がみられた。冬至の認知では、両県の親世代で「認知あり」が

100%であった。冬至の経験は、岡山県と島根県の両県で有意差がみられた。両県ともに、親世代の約1割、子世代の約2割の人は行事を認知していても、経験したことがなく、両県の子世代の約1割は認知も経験もしていないことが示唆された。

春まつり

春まつりとは主に灌仏会を表す。灌仏会とは、釈迦（釈迦牟尼仏）の降誕日（誕生日）の祝いで、釈迦像を灌沐（水を注ぎ洗い清める）する仏教の儀式である。「仏生会」「降誕会」「浴仏会」ともいうが、一般には花祭と呼び、毎年4月8日に、各地の寺院で行われる。新暦の5月8日に行うところもある⁶⁾。

春まつりは認知・経験ともに、岡山県でのみ有意差がみられた。しかし、両県ともに「認知あり」「経験あり」と答えた人の割合は50%未満であり、過半数以上の人がこの行事を認知も経験もしていないことが明らかとなった。

3. 年中行事における両県間の世代ごとの比較結果

3-1. 年中行事の認知及び経験の世代ごとの比較

3-1-1. 年中行事の認知における世代ごとの比較

岡山県と島根県間の世代ごとでの年中行事の認知の割合において、子世代と親世代の両方で有意な差がみられた項目は盂蘭盆のみであった。子世代のみで有意な差がみられた項目は、上巳、端午の節句の2項目であり、親世代のみで有意な差がみられた項目は秋まつりのみであった。また、岡山県と島根県の両方で「認知あり」が100%であった項目は、子世代では正月のみであったのに対し、親世代では正月、七草、節分など9項目であった。子世代で有意差があった3項目ともに、島根県の方が「認知あり」の割合が高くなった。一方で、親世代では、盂蘭盆は島根県の方が「認知あり」の割合が高いが、秋まつりでは岡山県の方が高くなった（表4）。

3-1-2. 年中行事の経験における世代別比較

岡山県と島根県間の世代ごとの比較での年中行事において、認知・経験の両方とも有意差が見られたのは、盂蘭盆のみであり、両世代において島根県よりも岡山県の方が認知・経験している人が有意に少なかった。このことから盂蘭盆は、岡山県では島根県よりも認知度は低く、行事が行われていないことが示唆された。

親世代のみで有意な差がみられた項目は、七草と秋まつりの2項目であった。七草の経験は、親世代において、岡山県よりも島根県の方が経験している人が有意に少なかった。岡山県では、親世代の方が「経験あり」の割合が高いが、島根県では子世代の方が高かった。秋まつりでは、認知・経験ともに親世代において、岡山県よりも島根県の方が認知・経験している人が有意に少なかった。子世代は両県でほとんど変わらなかった。このことから岡山県での秋まつりは、親世代までは行事が伝承されているが、島根県では親世代ですでに伝承が途切れかけていることが示唆された。

端午の節句の認知は、子世代において、島根県よりも岡山県の方が認知している人が有意に少なかった。島根県では、子世代・親世代ともに認知している人が100%であった。

また、岡山県と島根県の両方で「経験あり」が100%であった項目は、親世代の正月のみであった。子世代で有意差があった盂蘭盆は島根県の方が「経験あり」の割合が高くなった。一方で、親世代では、盂蘭盆は島根県の方が「経験あり」の割合が高いが、七草と秋まつりでは岡山県の方が高くなった（表5）。

表4 年中行事の認知における世代ごとの比較

年中行事	世代別	子世代			親世代		
		認知あり	認知なし	有意差	認知あり	認知なし	有意差
正月	岡山県	100.0	0.0		100.0	0.0	
	島根県	100.0	0.0		100.0	0.0	
七草	岡山県	96.5	3.5		100.0	0.0	
	島根県	95.5	4.5		100.0	0.0	
節分	岡山県	99.5	0.5		100.0	0.0	
	島根県	100.0	0.0		100.0	0.0	
上巳	岡山県	93.7	6.3	5%水準で	99.4	0.6	
	島根県	100.0	0.0	有意差あり	100.0	0.0	
春分の日	岡山県	89.3	10.7		99.4	0.6	
	島根県	94.4	5.6		100.0	0.0	
端午の節句	岡山県	91.7	8.3	1%水準で	99.4	0.6	
	島根県	100.0	0.0	有意差あり	100.0	0.0	
盂蘭盆	岡山県	55.1	44.9	5%水準で	81.8	18.2	5%水準で
	島根県	74.5	25.5	有意差あり	95.9	4.1	有意差あり
七夕	岡山県	98.0	2.0		95.8	4.2	
	島根県	100.0	0.0		98.0	2.0	
土用の丑	岡山県	96.1	3.9		100.0	0.0	
	島根県	100.0	0.0		100.0	0.0	
重陽の節句	岡山県	18.5	81.5		28.0	72.0	
	島根県	19.0	81.0		18.4	81.6	
お月見	岡山県	98.5	1.5		100.0	0.0	
	島根県	100.0	0.0		100.0	0.0	
秋分の日	岡山県	86.8	13.2		100.0	0.0	
	島根県	91.4	8.6		100.0	0.0	
冬至	岡山県	91.3	8.7		100.0	0.0	
	島根県	92.9	7.1		100.0	0.0	
クリスマス	岡山県	99.5	0.5		100.0	0.0	
	島根県	100.0	0.0		100.0	0.0	
大晦日	岡山県	99.5	0.5		100.0	0.0	
	島根県	100.0	0.0		100.0	0.0	
春まつり	岡山県	23.4	76.6		44.3	55.7	
	島根県	31.8	68.2		45.9	54.1	
秋まつり	岡山県	38.4	61.6		82.7	17.3	5%水準で
	島根県	38.1	61.9		65.8	34.2	有意差あり

(単位：%)

IV 考察

古来より日本人は、季節の節目や人生の節目をハレの日とし儀礼や祭りを行ってきた。その節目には特別な趣向や思いを込めた食事を作り、大切に味わってきた。現在のように食生活が豊かになる前は、日常の食事は質素であっただけに、ハレの日の食事には自然や神仏への感謝の思いや、未来の幸福への強い願いが込められた⁵⁾。

多くの行事や儀礼が江戸時代までに確立されて行われており¹⁰⁾、特に五節句(人日、上巳、端午、七夕、重陽)を節句の代表としたのは、江戸時代の幕府であった⁶⁾。しかし、明治5(1872)年11月9日、明治政府は太陽暦を採用し明治5年12月3日を明治6年1月1日とした。それにより、新暦の正月は「新春」に遠く、七夕は梅雨の最中、7月15日の盂蘭盆は農繁期であるように、暦と季節が合わなくなった¹¹⁾。このことから、年中行事に対する関心が薄れてきていると考えられる。

さらに明治政府は太陽暦に変えると同時に五節句を廃止して国家祝祭日を新たに定めた。これらは、新穀を神に供える新嘗祭を除くと明治になって創られた宮中祭儀に基づいている。国家祝祭日である天長節や紀元節など天皇に関係する新奇な日だけを国

民全体で祝うべきだとされ、こうした天皇神話の具体化と、太陽暦のような西洋化とが、江戸時代の宮中や民衆の慣習を否定しながら重なり合って進行した¹¹⁾。この影響を特に受けた行事は、重陽の節句だと考えられる。本研究の結果でも、重陽の節句では他の五節句の結果と異なり、岡山県・島根県の両県で、子世代・親世代ともに「認知・経験あり」の割合が低く、行事そのものが認知されていなかった。9月9日の重陽の節句は九が重なることから、「重九」ともいい、字音が「長久」に通じるのでめでたいとされ、菊酒を飲んだり、栗飯、栗赤飯、菊和えの料理を食べるなどして不老長寿を祝う⁶⁾。しかし現在は同時期に国民の祝日である「敬老の日」があり、この「敬老の日」もまた高齢者を敬い、長寿を祝う日である。この影響もあり、重陽の節句は行われなくなり、行事そのものを認知している人も減少したと考えられる。

しかし同じ五節句でも、島根県における七草の経験の結果では、「経験あり」と答えた割合が、親世代より子世代の方で高くなっている。七草の節句は新暦では雪の降り積るころであり、七草の節句で食される七草粥に使われる春の七草は天然物を手に入れることは困難である。しかし近年では、ハウス栽培などにより、スーパーなどで簡単に手に入れることができるようになったため、七草の行事を再び行おうとする傾向にあるのかもしれない。

仏教行事である彼岸や盂蘭盆は、本研究の結果において、両県ともに認知度は全体的に高いが、経験の有無では、子世代において低くなっている。これらの行事に共通する点として、仏に供物をしたり、墓参りをし、先祖を敬い供養するという点である。子世代の経験が低くなった一因として、核家族化と人口の都市集中が挙げられる。核家族化により、高齢者と同居する世帯の減少とともに、両親の実家や生家から離れて暮らしているため盂蘭盆に先祖を迎えることもなく、先祖の墓が遠いことが影響していると考えられる。盂蘭盆においては、世代ごとに比較すると、子世代・親世代ともに、島根県よりも岡山県の方が、認知・経験している人が有意に少ないことが分かる。両県の家族構成の分布において、岡山県では三世代よりも二世代が多く、島根県では二世代と三世代であり差が無かった。平成22年国勢調査の結果において、両県の一般世帯における核家族世帯の増加率を比較すると、島根県では平成17年

表5 年中行事の経験における世代ごとの比較

年中行事	世代別	子世代			親世代		
		経験あり	経験なし	有意差	経験あり	経験なし	有意差
正月	岡山県	99.5	0.5		100.0	0.0	
	島根県	100.0	0.0		100.0	0.0	
七草	岡山県	65.2	34.8		80.4	19.6	5%水準で有意差あり
	島根県	74.2	25.8		65.3	34.7	
節分	岡山県	96.7	3.3		99.4	0.6	
	島根県	100.0	0.0		100.0	0.0	
上巳	岡山県	87.4	12.6		95.1	4.9	
	島根県	91.5	8.5		98.0	2.0	
春分の日	岡山県	53.9	46.1		89.8	10.2	
	島根県	66.2	33.8		94.0	6.0	
端午の節句	岡山県	73.2	26.8		91.6	8.4	
	島根県	73.9	26.1		96.0	4.0	
盂蘭盆	岡山県	27.6	72.4	5%水準で有意差あり	62.3	37.7	1%水準で有意差あり
	島根県	41.8	58.2		85.7	14.3	
七夕	岡山県	67.7	32.3		69.7	30.3	
	島根県	78.9	21.1		78.0	22.0	
土用の丑	岡山県	89.8	10.2		96.4	3.6	
	島根県	95.8	4.2		100.0	0.0	
重陽の節句	岡山県	5.8	94.2		8.0	92.0	
	島根県	2.4	97.6		2.6	97.4	
お月見	岡山県	73.3	26.7		79.0	21.0	
	島根県	70.4	29.6		80.0	20.0	
秋分の日	岡山県	52.0	48.0		88.3	11.7	
	島根県	58.6	41.4		96.0	4.0	
冬至	岡山県	69.2	30.8		91.1	8.9	
	島根県	70.0	30.0		92.2	7.8	
クリスマス	岡山県	98.6	1.4		98.8	1.2	
	島根県	100.0	0.0		100.0	0.0	
大晦日	岡山県	97.6	2.4		99.4	0.6	
	島根県	100.0	0.0		100.0	0.0	
春まつり	岡山県	14.4	85.6		32.2	67.8	
	島根県	20.5	79.5		24.3	75.7	
秋まつり	岡山県	27.9	72.1		76.3	23.7	1%水準で有意差あり
	島根県	31.0	69.0		47.4	52.6	

(単位: %)

より1.6%増加したのに対し、岡山県では3.1%の増加がみられた¹⁾。これらのことを合わせて考えると、岡山県は鳥根県よりも核家族化が進んでいると推察される。

春の農耕開始に先立って豊作を願う行事である「春まつり」は、全体的に「認知・経験あり」の割合が低くなったのに対し、翌年の五穀豊穡を祈る儀式である「秋まつり」は親世代では認知経験ともに比較的高かったが、子世代では低くなった。両県の世代間比較から、両県ともに以前は秋まつりが行われていたが、現在はほとんど行われなくなっているということが考えられる。しかし、鳥根県を例にあげると、毎年出雲大社において古伝新嘗祭が行われている¹²⁾ように、その伝統が途切れているとは考えにくい。本研究に用いた調査票には、「春まつり」「秋まつり」とだけ記されており、対象者が、春まつりが灌仏会（花祭）、秋まつりが新嘗祭と結びつけて回答しているのかが不明であり、本当に現在行事が行われていないのかという点には疑問が残る。そのため、年中行事の記載の仕方についてさらに検討を重ねるとともに、何を持って「認知あり」「経験あり」とするのかの定義付けが、本研究をさらに深める上で重要になってくると考えられる。

謝辞

調査にご協力頂きました岡山県及び鳥根県の皆様方に心より感謝致します。

文献

- 1) 平成22年国勢調査 総務省統計局
<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/index.htm>
- 2) 平成22年国民生活基礎調査 厚生労働省
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/20-21.html>
- 3) 『日本料理 行事・仕来り大事典 実用編』, プロスター, 2003年
- 4) 大好き「晴れの国おかやま」岡山県総合政策局公聴広報課
<http://www.pref.okayama.jp/page/detail-114180.html>
- 5) 鳥根県のプロフィール 鳥根県政策企画局広聴広報課
<http://www.pref.shimane.lg.jp/admin/seisaku/koho/profile/>

- 6) 『日本料理 行事・仕来り大事典 用語編』, プロスター, 2003年
- 7) 佐々木輝雄, 『「年中行事から食育」の経済学』, 筑波書房, 2006年
- 8) 松下幸子, 『祝いの食文化』, 東京美術, 1991年
- 9) 国民の祝日に関する法律
<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S23/S23HO178.html>
- 10) 渡辺信一郎, 『江戸の庶民生活・行事事典』, 東京堂出版, 2000年
- 11) 松尾正人, 『日本の時代史21 明治維新と文明開化』, 吉川弘文館, 2004年
- 12) 高橋秀雄・白石昭臣, 『祭礼行事・鳥根県』, 桜楓社, 平成3年

**Research investigation on the current cookery culture based on cognition
and experience in traditional event foods
—Comparison of Okayama prefecture with Shimane prefecture—**

**NATSUKI GANEKO*, YUKO MATSUMOTO*, MASUMI KIMOTO*,
HIROMI YAMASHITA***

**Department of Nutritional Science, Okayama Prefectural University, 111 Kuboki, Soja-shi, Okayama, 719-1197,
Japan*

Keywords : cookery culture, event foods, cognition, experience